心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ⑤

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様におとどけしています。

おじいちゃんの黄色い旗

自分の人生の終わりについて考える事はとても大切なことです。若いころは体が弱く二十歳まで生きられないと言われ、学徒動員も免除された私がおかげ様で八十五歳を迎えることができました。

定年してからの日課と言えば、畑仕事と、朝の交通指導員。日々成長する子供たちから元気をもらっています。

去年の夏の終業式の日、朝一番暑くなる前に畑へ行き草を取り、その後子供たちの登校を見送りました。その夕方、なんだか腰が痛くなり、「草取りの時、腰を痛めたかな」と家内と話をして、しばらくしてもまだ痛いので、整骨院に行きました。過労だろうという事で湿布やマッサージを受け、少し良くなりましたが、日に日に痛みが増してくるのです。**10日ほど経った頃には、起き上がれないほどの激痛に襲われ、近くに住む娘夫婦に大学病院に連れていってもらいました。**

診断の結果、骨にウィルスが入る珍しい病気で、もう少し遅ければウィルスが脳に回って命に係わる状態でした。3週間の寝たきりの絶対安静での投薬治療、その後半年の入院を告げられました。

私なんかが、よくここまで生きられたものだと、半分覚悟を決めました。筋力の低下やボケも来るだろう。その前にと思い、家内に「エンディングノート」を買ってこさせ、この人だけには伝えてほしいなどを前向きに書き込みました。

おかげさまで一進一退しながらも治療は進み、1か月後本格的なリハビリが始まりましたが、筋肉は衰えとても立てる状態ではなく、体力もなくなり家族の励ましにどれほど応えられるのか私自身不安な日々が続きました。

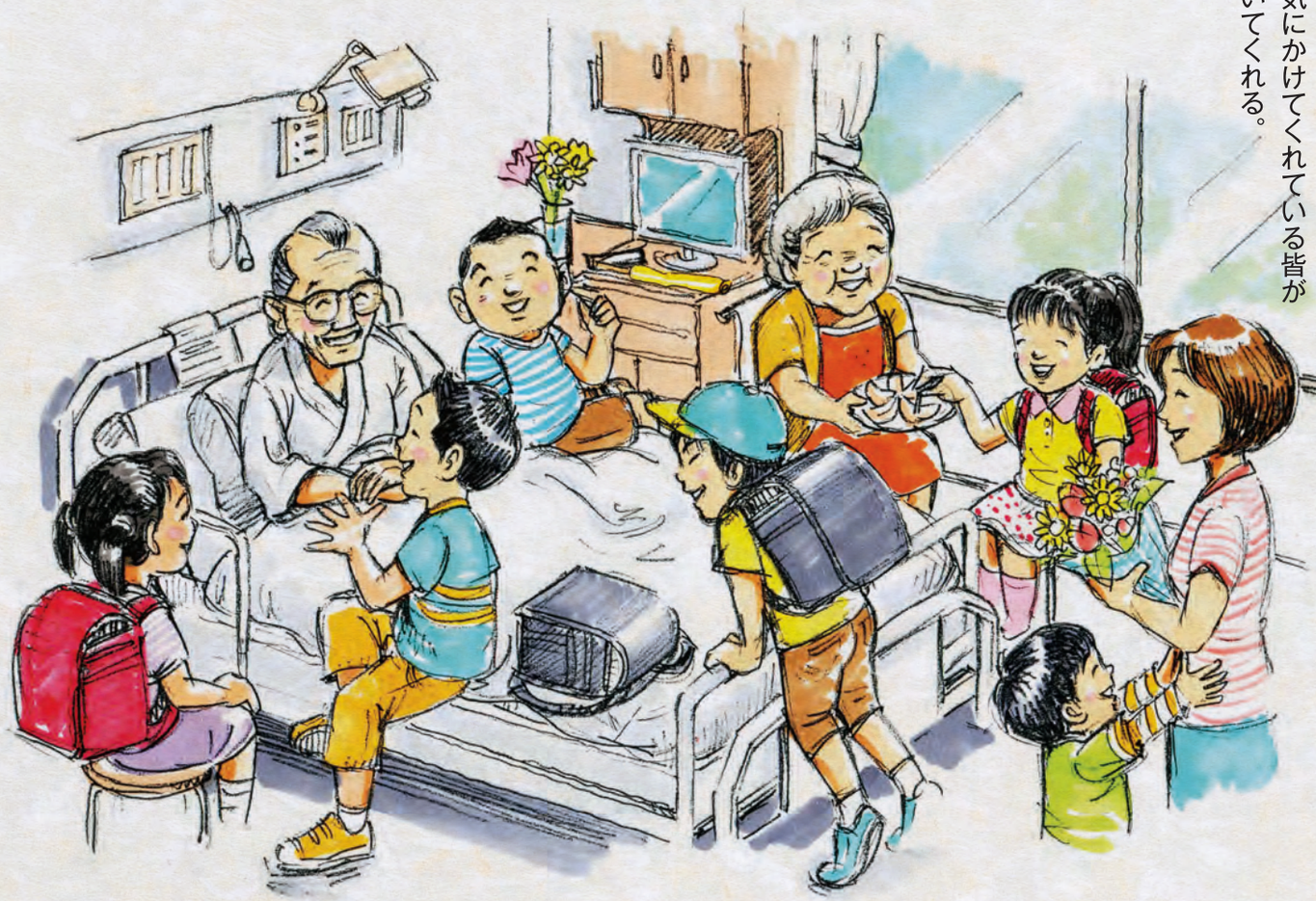
そんな折、突然5人の小学生が部屋に入ってきました。大変驚きました。

近所の子で、毎朝・夕学校の行き帰りを見送っている子たちです。その日から、毎日のようにいろいろな子がお見舞いに来てくれるのです。

「夏休みが終わって、おじいちゃんが居ないから、みんなでお見舞いに来たんだよ。」と言って学校帰りに病室にかわるがわる顔を出してくれるのです。

顔を見るたびに、目頭が熱くなるのを感じながらも、まさか泣くわけにもいかないと必死でこらえました。そりゃあもう嬉しくて、リハビリにも一段と力が入りました。

こんな年になると自分の事を心配してくれるのは家族だけかと思っていましたが、知らないところで、気にかけてくれている皆がいてくれる。



そう感じることができたのは、人生の宝物となりました。

家内に言って、黄色い旗をベッドの横に置いて、もう一度、この旗を持って、もう一度、子供たちの笑顔が見たいと思いリハビリに精を出しました。

そして、遂に先日10か月ぶりに交差点で新一年生を見送ることができました。

今までなら当たり前の日常がこんなに嬉しいこととは。一つでも多くの笑顔をこれからも見送ろうと、今日も交差点に立っています。

よろづのことよりも、情けあるこそ、男はさらなり、女もめでたくおぼゆれ
清少納言

枕草子の一節で、何より思いやりの心が大切で、特に思いがけない好意ほど男も女も心潤うことはないと言っています。
古来より日本人の心に宿る思いやりの心を今日も忘れずに日々を送りたいものですね。

あなたの町のアーバンホール
葬儀・法要・ギフト アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール「ちょっといい話」係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。